
三題噺「新生活マンホール」

三木こう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三題噺「新生活マンホール」

【Nコード】

N2539T

【作者名】

三木こう

【あらすじ】

バイトでアパートの一室を掃除していた主人公。畳をめくった先にはマンホールがあつて……。

畳をめくると、マンホールがあった。

「えっ？」

掃除機をかけようと、畳をめくったその先に突然現れたマンホール。大学の先輩から紹介された簡単なバイトで、近所のアパートの一室を掃除にしかただけなのだが……たしかにこここのアパートは鉄筋コンクリート造りだし、今いる部屋は一階だからして、それほどありえない話ではないようが気がする。

「いや、変に決まっている」

なんとなく納得してしまいそうになる自分にツツコミを入れながら、じつとワンルームの丁度中心辺りに現れたマンホールを見つめてみる。

綺麗な、黒色をした金属質なフォルム。

こうやって畳に隠れていたせいか、サビや汚れ一つないその姿はつい撫でたくなるような魅力がある。

「けど、部屋にあつていいもんじゃないよな、やっぱり」

例えば彼女なんていないけれど、もし、万が一、何かの間違いで、女の子が俺の部屋を訪れた時のことを考えてみよう。

部屋の中央に置かれたピカピカのマンホール。

きゃーおしゃれ！　なんて好感度アップの素敵アイテムに……なるわけがない。正直ドン引きだろ、ていうか俺でもこんなのが友達の家にあつたらいやだ。

「管理人さんに電話でもした方がいいのかな……」

携帯を手に取り、アドレス帳で連絡先を探してみる。

すると、その時、ガタガタとマンホールが軋む音がした。

「……お父さん！　なんだかここ、のぼれそうですよ！」

「なん……だと……。ここはポイント47、通称開かずの扉だぞ！

ここ百年間は誰も到達してことがないというのに」

そして、地下から響くなぞの話し声。

この辺りでさすがの俺も異常を感じ取っていた。これはあれだろ
うか、夢か。いや百歩譲って現実だと認めたとしては十中八九大掛
かりなドッキリとか、テレビ番組の企画とかだろ。

するつていとあれか、このマンホールから出てくるのはドッキリ
大成功の立て札を握ったタレントさんだったりするのだろうか。

「お父さん！ やりました、やりましたよ！ ついに到達です！」

「おお、ここがマンホールの向こう側の世界なのか……すばらしい」
しかし現れたのは、古めかしいなんとなく冒険者チックな衣装を
来なすつたいい年のおっさんと、若い娘さんだった。

彼らはマンホールから一気に部屋の中へと飛び出すと二人で抱き
合い喜びあっている。

「あの……なんかのテレビっすか？ それとも映画の撮影とか？」

驚きもせず、突然現れた謎の人物に話し掛けた。どうやら、この
人たちのあまりに場違いな姿にシラケているというか、ある意味冷
静になってしまったようだ。

「お、あなたは、地上の人！ お邪魔してしまつてすみません」

「こら、宮子。あまりはしゃぐんじゃありません。すいません、娘
は地上が初めてのものです」

しらーっとした目線で、二人を見る。何を言い出しているのだろ
う。

「こついう時はどうするんだっけ、お父さん……。そうだ、たしか
つまらないものですが、だよね」

「そうだそうだ、それを忘れてはいけないね」

正直、満面の笑顔でこちらに寄ってくる娘さんはそれなりに可愛
かったりなんかして、心が動きそうにもなったが、それよりもこの
人たちの話の胡散臭さの方が際立っている。

「これをどうぞ、ただの石っころだが、綺麗だろ？」

「……えっ、それ、もらえるんですか」

見覚えがある。母親の結婚指輪に八メられた石と似た輝き。

本物かどうかを判断する眼力は残念だから俺には存在していないが、興味をそそられたのは本当だった。それぐらいに魔力のある美しさに思わず見惚れてしまう。

「お、お気に入りいただけただようでなによりだ。しかし残念だ、どうせならもっとたくさん持ってくればよかったね。私たちの国にはそれがたくさんあまっているから」

「あの、マンホールの下に国というか地下世界みたいなものがあるってことですか？」

「はは！ いやー、物分りがよくて助かるよ。だいたい人は信じてくれないけどね。どうだい、ちよつと覗いてみないか、今ならちよつど灯りのついた街並みぐらい見れるかもしれないよ」

正直、心惹かれるものがあつた。

一時の気の迷いでもいいから、そういうものが存在していると信じてみたいと思えてしまう。元々俺みたいな男の子は、そういう夢を持っているはずなのだ。

「えっと、それじゃあ失礼して……。うーん、どこですか、まだなにも見えないですけど」

「もう少し進んでみるといい」

見たこともないようなダイヤモンドひとつで、こんな胡散臭い話を信じてしまうなんて、自分が情けない。それでもやっぱりダイヤモンドがタダのように存在している世界なんて、やばすぎるだろう。大学の学費だって、俺が払ってやれるし、親の仕送りももらわなくていいし、友達とも豪遊しまくれる。

「うわー真っ黒ですよ、これ。下の方まだ全然見えないし」

「そうですね、だって地下ですから」

「いやー、助かるよ。いきなり地上の人間に出会えるなんて、これで私たちの仕事も終わりだ。あとはそこで待つてればいいから」

ふわりと体が浮く感覚。

無防備に乗り出していた俺の体は、そつと後ろから背中を押されただけで、簡単にマンホールの通路へと落ちていく。なんとかハシ

ゴにつかまりながら、必死に脱出しようと登ってみるが、固く閉じられたマンホールは空きそうにない。

「やったね、お父さん。こんなに早く獲物が見つかるなんて最先がいいや。ノルマ達成したからしばらく私たちが地上にでる番だね」

「そうだな宮子。さあ、地上の生活を楽しみに行くこうじゃないか。ちゃんと片付けをしたらね。ふ、今夜はごちそうだぞ」

楽しそうな家族の会話。

開かないマンホール。

近づいてくる地下からの物音。

地下の世界は、暗闇に包まれていた。

(後書き)

お題、「マンホール、貴、ダイヤモンド」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2539t/>

三題噺「新生活マンホール」

2011年8月1日03時34分発行